The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第六十一巻第一号　平成二十四年十二月

和泉阿闍梨源空

長谷川浩文

はじめに

法然（一一三三～一二一二）の史跡や伝承がこれまで、高野山塔頭寺院である清浄心院に存在することが明らかとなった。[1] ここでは、高野山塔頭寺院である大楽院に住した信堅（一二五九～一三二二）によって、鎌倉時代後期に書写された「金剛峯寺彼岸廻向道俗結縁過去帳○続宝簡集五十九」[2]（史料A）、並びに同じく信堅によって書かれた『信堅院号帳』[3]（史料B）にそれぞれ記載のある阿闍梨源空を調べる。史料Aは、高野山文書『続宝簡集』の中に収められており、国宝に指定されている。

一　『金剛峯寺彼岸廻向道俗結縁過去帳』

史料Aは、最初に「金剛峯寺恒例彼岸廻向道俗結縁過去帳」とある。高野山金剛峯寺で恒例に行われていた彼岸廻向の結縁者過去帳である。奥書には次のようにある。

已上爲音曲相承、取簡、省略書寫畢、
永仁五年丁酉六月十日　　信堅
金堂過去帳軸文云、
金剛峯寺過去帳
寛仁四年庚申
建久五年甲刀閏八月八日書畢、
文明五癸巳三月廿九日、以龍生院、於清浄光院書寫畢、
三地遺弟権少僧都廣譽祐深房満四十

永仁五年（一二九七）に信堅が、音曲相承のために、金剛峯寺過去帳から結縁者を選び取って書写した模様である。数えてみると、総数二百十三名であった。現在人物を特定するために調査中であり、おそらく結縁者全員が、永仁五年以前の人物であろうと考えられる。金堂過去帳の軸に金剛峯寺過去帳とあって、寛仁四年（一〇二〇）、建久五年（一一九四）にそれぞれ結縁者を追加しながら書写したことが読み取れる。権少僧都廣譽祐深房は、文明五年（一四七三）満四十歳の時に、当時龍生院にあった信堅の作成した音曲相承のため

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

の金剛峯寺過去帳を、清浄光院において書写したとある。

この過去帳は、大きく五つのグループに分けて作成されている。結縁者を眺めてみると、天皇・皇族方（第一グループ二十四名）、高野真言系の諸大寺・諸門跡方（第二グループ九十一名）、摂関家・源氏・平氏方（第三グループ二十八名）、金剛峯寺検校方（第四グループ十五名）、聖方（第五グループ五十五名）であった。第五グループの聖方五十五名の中に、次の三名の聖人が列記されていた。

東大寺大和尚重源聖人　阿闍梨源空聖人
寶幢院鑁阿聖人

まず最初の東大寺大和尚重源聖人（一一二一～一二〇六）は、養和元年（一一八一）、東大寺再建のために勧進聖人に抜擢された。建久六年（一一九五）大仏殿を再建した功績により、大和尚位に叙せられた。史料Bには、「新別所　俊乗房上人南無阿弥陀佛之建立也（實名重源）」とある。

三番目の寶幢院鑁阿聖人（？～一二〇七）（一説に下野鑁阿寺の開基である足利義兼と同一人物とする説がある）[4]は、高野法華房と呼ばれ、高野山の勧進聖として活躍した僧侶である。同じく史料Bには、「寶幢院　寶塔三昧院。後白川院御願也。願主丹後二位殿。下蓮臺院。最初ハ常喜院ノ心覺建立云云後鑁阿上人法華房勧進建立云云梨子坊有レ之」とある。

重源聖人と鑁阿聖人ともに高野聖であって、重源聖人は花折谷から小さな峠を越えた新別所と呼ばれる別の谷の専修往生院に住していたし、鑁阿聖人は寶幢院谷の寶幢三昧院に住していた。それぞれの谷は大きく見れば蓮花谷に位置し、高野山の中でも特に専修念仏の盛んな谷であった。重源の師匠は、法然とも言われている。

以上から考えるに、二番目の阿闍梨源空聖人は、浄土宗を開いた法然と思われる。高野山では、法然のことを阿闍梨源空聖人と呼んでいたことになる。このことは、浄土宗にとって全く新しい法然像の見直しを意味し、本研究の意義もここにある。

二　『信堅院号帳』

史料Bは、信堅によって鎌倉時代後期に書かれたものである。高野山の主な塔頭寺院の名と由来を記述したものであり、中でも最も古い史料である。信堅とは、先ほどの国宝に指定されている史料Aを書写した人物である。

外題下に「随心院尊海」「無量壽院」とあり、本題下に「記者大楽院信堅即借自筆本写之」とある。随心院尊海（一六二五～一六九五）が大楽院信堅の自筆本を借りて、写した模様である。そして、その後本史料は無量壽院にあったようである。三寶院の箇所には次のように記されている。

三寶院

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

和泉阿闍梨源空建立也

筆者は、当初史料Aと史料Bに見られる「阿闍梨源空」について、同一人物の可能性について調べていた。しかし、最近になって史料Aと史料Bに見られる「阿闍梨源空」とは同姓異人ではないかと考えるようになった。その根拠は、史料Bに見られる和泉阿闍梨源空とは、高野御室覚法（一〇九二～一一五三）の弟子である兼助阿闍梨（一一〇四～一一八〇）ではないかと考えられるからである。『血脈類集記』には、「兼助阿闍梨（十二代。高野御室弟子　付法十人。五十七。於高野山卒。七十七。改名源空。號和泉阿闍梨）」とある。(5)

史料Aと史料Bを書いた信堅は、両史料に見られる阿闍梨源空を明らかに同姓異人であることを理解し、区別して書いていると考えられる。

三　『新別所由来記』

『紀伊続風土記』「高野山之部学侶方」の中で、来隠として正傳二十人附見八人を挙げている。合計二十八人の内、六人は『新別所由来記』を引用して書かれている。入道圓阿弥について次のようにある。(6)

入道圓阿弥傳　附西入

入道圓阿弥。俗名云二杢允友時一。三位中将重衡之族也。元暦元年七月。法然上人乞二得重衡之首一令三友時ヲシテ瘴二高野奥院一。其後出二塵綱ヲ一。入レ道ニ。結二専修往生院ノ社友ヲ一。盡夜勤念矣。未レ知二其終ヲ一。（由来記。）（後略）

重源は東大寺大仏再興を仰せつかった以降、高野山を下山するが、それとともに次第に新別所の二十四蓮社友も衰退の一途をたどる。

本史料が『由来記』からの引用であることは重要である。『由来記』とは、『新別所由来記』のことである。元暦元年（一一八四）七月、法然は平重衡の首を手に入れて、友時に命じて高野山奥院に瘴じたとある。「瘴じる」とは意味が不明であるが、埋葬のことと考えられる。懐英（一六四二～一七二七）は『高野春秋』において同様に、「元暦元年七月日。木工允友時斎二平重衡之髑髏ヲ一。来瘴ムル二奥院ニ一。是法然上人乞二得梟首一。送二遣日野ノ里ニ一。平後室令二友時ヲシテ来葬一也。譜曰。友時宿二于往生院三寶院一云云。」と述べた。(7) 懐英は『新別所由来記』を引いてこの箇所を書いた可能性がある。残念ながら、『新別所由来記』は現時点では所在が不明である。

『新別所由来記』には、法然上人のことが記されている。(8)

法然上人。幷俊乗房重源。文治年間登嶺あり。重源は別所に留住し。廿四人の社友に冠たり。后鎌倉殿の召に應して下向す。（御使前播部頭親能。）事畢て。亦歸住す。建永元年六月。東大寺に入寂すといふ。（新別所來由記。）

『新別所來由記』とあるが、『新別所由来記』のことであろう。文治年間（一一八五～一一九〇）に法然上人と俊乗房重源

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

は高野山に登嶺したとある。

おわりに

史料Aに見られる阿闍梨源空聖人は、和泉阿闍梨源空とはなっていないので、兼助とは別人と考えられる。東大寺大和尚重源聖人と寶幢院鑁阿聖人に挟まれた阿闍梨源空聖人は、法然房源空と見て間違いない。高野山において、法然は阿闍梨源空聖人と呼ばれていたことが明らかとなった。史料Bにあった和泉阿闍梨源空とは、高野御室覚法の弟子である兼助阿闍梨であることが明らかとなった。

筆者は、真言宗の史料に法然上人の史跡や伝承がまだいくつか存在していることを確認している。阿闍梨源空を調査する場合、和泉阿闍梨源空と混同された可能性が考えられるので、注意が必要である。

懐英は、久安五年（一一四九）の雷火の後、廃絶していた三寶院を文治初年頃に再興したのは、法然と考えていた。懐英は、『新別所由来記』から引用した可能性がある。新別所の二十四蓮社友について、「舊記」を引用しながら二十四人が特定されている。[9] この「舊記」は、『新別所由来記』を指していると考えられる。先ほどの正傳二十人附見八人の合計二十八人の内、十八人が二十四蓮社友に見られる。『新別所由来記』は、いつ誰が何を根拠に作成したのか、今後の課題である。そして、法然上人と俊乗房重源が文治年間に高野山に登嶺したかどうか明らかにする必要がある。

1 拙稿「清浄心院谷にあった曼荼羅堂（その一）」『西山学報』第三号、二〇一一、三九頁。
2 高野山霊宝館『国宝　高野山文書『宝簡集・続宝簡集・又続宝簡集』』小林写真工業株式会社、二〇〇四。
3 日野西真定「（史料紹介）『信堅院号帳』大楽院信堅撰」『堯榮文庫研究紀要』親王院堯榮文庫、一九九七、二〇二頁。
4 日本仏教人名辞典編纂委員会編集『日本仏教人名辞典』法蔵館、一九九二、六八〇頁。
5 高野山大学出版部『真言宗全書第三九』（『血脈類集記第六』）同朋舎メディアプラン、二〇〇四、一四五頁。
6 続真言宗全書刊行会『続真言宗全書第三九』（『紀伊続風土記』「高野山之部学侶方」）一九八二、九二頁。
7 日野西眞定編集校訂『増訂第二版　新校高野春秋編年輯録』岩田書院、一九九八、一二〇頁。
8 続真言宗全書刊行会『続真言宗全書第四〇』（『紀伊続風土記』「高野山之部学侶方」）一九八三、三三九頁。
9 前掲『続真言宗全書第三九』三二三頁。

〈キーワード〉　法然、『信堅院号帳』、『続宝簡集』、阿闍梨源空

（浄土宗西山深草派宗学院研究生）

NII-Electronic Library Service